平家物語の成立

――平清盛の造型における問題をめぐって――

森井雅子

本文中の諸本略号

源平闘諍録（闘）　屋代本（屋）
四部合戦状本（四）　百二十句本（百）
長門本（長）　覚一本（覚）
延慶本（延）

『平家』における清盛は一口に言えば「猛き人」「おごれる人」としての人物造型の契機を持っている。それは又、松本氏が云われているような〈ただ一ずに清盛を歴史の悪役として、その一面だけを追求した〉(注1)造型とも受けとることができるが、その反面において、清盛の死後に続く一連の清盛関連説話である「築島」「慈心房」「祇園女御」等、個々の物語や事件では、「猛き人」「おごれる人」の契機が権力者としての清盛の姿より、むしろ一個の巨大な英雄像としての姿に現われ、その超人的力に対する賛嘆の念が、そこに見られる。

まぢかくは、六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公と申し人のありさま、伝承るこそ心も詞も及ばれね。（巻一「祇園精舎」）

との、序章にみる清盛物語の語りの発端は、清盛を古今の反逆の系譜にみながらもそれら全てを超えた存在として、彼の英雄的資質の大きさを物語るに他ならない。すなわち、『平家』全体を通じて、清盛は善・悪共に常人の発想の範囲を超えたところに存在する〝力〟を持つ人物として描かれ、そこに、『平家』の中で彼の悪業が即、平家の滅びに直結するものとしてとらえられる必然性があるのである。当時における〝悪〟の名乗りが意味するように（悪源太義平、悪七兵衛…云々という場合の〝悪〟はその力に通ずるものとして受けとられている）、清盛の力そのものが〝悪〟に通ずる巨大な力なのであり、彼の内にある英雄性自体、「平家の悪行」と見なされ得る力でもあるわけである。

平家物語もその発端は平清盛個人にはじまる。しかし、その清盛の所業は「是こそ平家の悪行のはじめなれ」というようにたんに個人の所業ではなく、平家という個人をこえた何ものかの所業全体をとらえる文脈のなかに位置づけられる。（「平家物語における集団主体」杉山康彦　和光大学文学部紀要　昭42）

杉山氏の云われる、この「平家という個人をこえた何ものか」に

移行する清盛の所業こそ、彼の平家物語にみる英雄性を意味する〝力〟そのものなのであり、その〝力〟のなせる所為故、平家は滅亡しなければならなかったのである。この点で、渥美かをる氏はまた、次のように述べておられる。(注2)

原作者の構想した清盛は全く特殊であったと推考する。彼には天賦にそなわる超越的な〝力〟があったとする。およそ物語の主人公としてかかる性格を付与することは空前絶後と言えよう。

平家における清盛描写について、少くとも原平家に既に存在したであろうと思われる記事を抽出してみると、言われるように、清盛を悪玉と見る根拠は何も出て来ないのである。浮び出される清盛はすべて一であると言える。善とか悪とかの倫理観を超越した一の〝力〟なのである。清盛はその超越的な〝力〟を天賦に授っていたからこそ、位人臣を極め、天下を掌握することが出来た。

氏は、平家における清盛像を原平家（推）とそれ以後の加筆部分とにわけ、原作以後、概して清盛を賞讃する記事がふえていることに注目されている。清盛死後の一連の伝記体風の物語もそうであるが、「鱸」などの利生談も原平家には勿論無かった筈で、これらの物語が、原平家の清盛像を隠蔽することになったとされる。これらは一種の英雄崇拝的心理からきた説話(注3)と云ってよいが、前述した如く、序章における清盛個人に対する語りの契機にも通ずる造型を見ることが出来るのである。

以下、『平家』の成立にかかわる清盛造型の問題を、悪逆化と理想化への指向という点において考えてみたい。

○

入道相国、一天四海をたなごころのうちにぎり給ひしあひだ、世のそしりをもはばからず、人の嘲をもかへり見ず、不思議の事をのみし給へり。（巻一「祇王」）

この「祇王」の挿入も又、清盛にまつわる不思議の事としてとらえられ、そこに物語全体の構想における挿入の意味がある。この「不思議の事」という清盛の行動にみる評価が、『平家』の清盛をみる基準とも云えるであろう。同様に、清盛の悪行＝平家の悪行の始めとしてとらえられる「殿下乗合」の段で、重盛が、清盛の命をうけ基房に乱暴狼籍を働いた侍どもに向かい、「たとひ入道いかなるふし議を下知し給ふとも、など重盛に夢をばみせざりけるぞ…云々」という言葉にみる「不思議」の意識は、常人（ここでは都周辺の一般知識人、及び旧貴族階級の常識、すなわち、重盛に代弁される清盛批判）の目には悪行と映った「不思議」になるわけである。

ところで、この「祇王」の段は、（屋）においては抽書に出し、又、（闘・四）には無い。（延）にあって（長）に欠くなど、付加説話としての色彩が濃い段でもある。そして、挿入位置も、（百）では「清水炎上」の後にくるなど分れている。その中にあって比較的初期の段階を残しているように思われるのが（延）のあり方である。（渥美氏は、ここに旧延慶本を推測される）(注4)

すなわち、（延）においては、

其比都に白拍子二人あり、姉をは義王妹をは義女とそ申ける…

という挿入に始まり、義王・義女・仏御前らの出家を述べた後、

さて入道は仏を失て、東西手を分て尋ぬれとも叶はす、後にはかくと聞給けれとも、出家してけれは不力及さてやみ給き。

と、清盛のことにたち戻って物語を結ぶ。その出だしも突飛であるが、最後、清盛の事象として物語をしめくくることにより、説話を本文中に同化させようとする意志が明白にうかがわれるのである。この章段、もともと独立した別個の女性説話としての成立が考えられるが、（延）の場合、清盛の「不思議な振舞」の具体的類話として前後の詞章に続くというより、まず、白拍子の出家往生譚に焦点があり、それがたまたま清盛の物語に結びついて終わっていると云ってよい。（覚）では「恐らくは帝闕も仙洞も是にはすぎじとみえし」（「吾身栄花」）をうけて、清盛の栄華のうちに起った不思議の出来事として一応の照応をみた挿入であると思う。「何ならむ末の代までも何事かあるへきと目出そ見えし」（延）（覚）では「二代后」の冒頭から「祇王」の物語へ続く（延）の結末は、悪行の構想におけるこの説話の存在よりも、彼女らの宗教的世界に視点をみるという性格が強いように思われるのである。（延）の場合の説話のあり方は、清盛の〝不思議〟即、平家の悪行としての物語の構想に必ずしも同化したものとはなっていない。この点、（屋）においては、抽書としてではあるが、清盛の行為に〝不思議の事〟という意識の前提が入っているのである。しかしながら、本文中にある「殿下乗合」の章段での重盛の言葉にはその評はない。（百）に至っては、（屋）で云う「縦入道如何ナル事ヲ下知シ給フトモ…」云々の章句自体を欠いているのである。（闘）では「入道雖被下一知何不思議一争可レ不レ見レ夢二重盛一」とあり、この事件の結末を「此聞二平家悪行始一」と結ぶ。平家の悪行の始めとしての位置づけが明確であるが、「世の乱れ」の始めという意識はない。（覚）は、この「世のみだれそめける根本」の事件が又、清盛の悪行に始まる「平家の悪行のはじめ」でもあったわけである。（屋）の記述には「摂政関白ノカカル御目ニ合セ給事是ソ始」とあっても、「平家の悪行のはじめ」とはないことからして、『平家』にみる清盛の悪行と呼ばれる行為が、（覚）における物語の達成よりも説話的語りの興味の方に焦点があるのであり、それが（覚）の如く〝不思議〟なる振舞と云う統一した評価を加えることによって、物語的構想に清盛個人の発散する〝力〟が組み込まれていくことになるのである。（屋）の章段においてはむしろ、前段の「二代后」との関連において、「世の乱れ」を平家の悪行に結びつけて置こうとしているにすぎない。逆に、（闘）は源平の記事が交互に並列化している中で、この事件は「平家」清盛の悪行の始めという事柄が、源氏に対する平氏の記述として描かれるのである。（覚）の「世のみだれそめける根本」という意識は「二代后」等にみる、いわゆる中断された部分から平家の悪行の舞台を導き出す形となっているのである。「此聞二平家悪行始一」と章段を結ぶ（闘）は清盛悪行の物語として独立した説話の性格を持つと云えようか。

前述した如く、（百）は「殿下乗合」の前、「清水炎上」の後に「祇王」の挿入がある。

「二代の后」
「がくうちろん」　（世の乱れと平行して平家の地位が固る）

「ぎわう」
「ぎわうしゆっけ」
「てんかのりあひ」
「よのみだれとめぬるこんぼんは……これぞ平家のあくぎゃうのはじめなる」とは云いつつも、前後の構成からみる「世の乱れ」に対する意識は他と違ったものとなってくると思われるのである。清盛の不思議の振舞の一例である「祇王」に引き続き、「あはれなりし事どもなり（「祇王」）…さるほどに嘉應元年…（「殿下乗合」）と続くことで、これも又、清盛の「不思議」のことという関連性を持っていることは確かである。重盛の言葉に「不思議」の評がみえないのも、（百）が「祇王」と「殿下乗合」を共に、平家の政権確立後の清盛の〝力〟故に起った事件として取りあげるよう「祇王」をこの位置に挿入したためとも考えられる。

（清盛の不思議の振舞の類話）

以上、総括して云えば、（屋）には「世の乱れ」の始めという意識と清盛の悪行に対する「不思議」の認識とが直接的に結びつくところまでいかず、構想のうえにおいて、説話群と歴史的事件を何らかの意味で清盛個人に関連性をもたせることで、次の鹿谷事件へと展開をみる（覚）のあり方よりも、素朴な編集であると云える。又、（闘）にはまだ「世の乱れ」の始めという意識はないのである。「平家の悪行」＝「清盛の悪行」の始めとしてのみ、歴史的事件を取り扱う態度である。これは（闘）のあり方が、この事件を「二代后」「額打論」などにみる世の動き（王朝社会の崩壊）に伴なうものとしての関連から取り入れるものではなく、編年体にみる源平の歴史的事件を見る態度からと云うべきである。そして、これに反して、一種独特な構成のあり方を示しているのが（百）である。「祇王」の挿入位置にみるこの本の構想は、「祇王」「殿下乗合」を平家の政権確立・栄華の頂点に達した段階から清盛の「不思議」の行為を述べようとしているわけである。この点で、序章における清盛伝承の発端に通ずる「伝承るこそ心も詞も及ば」ぬ清盛の〝力〟を語る語りとして、まとまった構想を持っている。この本は、入道死去以後の清盛説話に関しても、語り系の（屋・覚）とは違う意図がうかがえると思うが、その問題については、今ここでは省く。

「祇王」の〝不思議〟も、又、「殿下乗合」における意識のあり方も、後に展開する清盛の行為を意図した行為の基準に他ならないと思われるのである。語り系の（屋・百・覚）において、「殿下乗合」は清盛に対比する重盛への賛美で章段を終わるのに対し、（闘）ではその後に、基房の有様を記す（国久丸の話）「其ー後奉知二殿下御事一ヲ入無一ー人モ……摂政関白御ト覧スル事ハ此憂目ヲ（ヒ）昔今モ可難有様此（ニ）聞二平家悪行始ト一」云々の詞章を以って事件を結ぶ形を取っており、（覚）などと丁度、詞章が逆の順に入る。語り系においては事件そのものは勿論だが、これからの『平家』における清盛と重盛、二人の対比の点に興味があるようである。そこで、『平家』の構想における二つの力の対立、すなわち、二人の対比に焦点を置いた虚構が行なわれるわけである。（闘）の方は、事件が平家の悪行としての歴史的意味をなすところに、物語の中心がある。（延・長）はこの事件の後日談（平家の悪行への風刺）を記す。清盛の悪行（周知の如く、この段の事件は史実によれば重盛のことであり、ここに清盛の造型における悪逆化への指向がうかがわれる）を語るという意味において、治承年間における清盛に対しての生語りとも云うべき伝承が推測されうるが、その導入によって〝悪行〟を通じて形成

された清盛の造型の物語的虚構が考えられるのである。

○

すでに云われてきたように『平家』に描かれている清盛の造型は、ほぼ治承年間における清盛に限られているのであって、しかも、清盛を悪逆化しようとする意図が働いているのである。そういった意味で、「殿下乗合」の事件も、まさに「世の乱れ」の始めとして悪行の力を描こうとするところに創作の力点がある。そこには、松本氏の云われる「玉葉の目」を通した清盛への視点のあり方が存在するかもしれない。(注7)

愚管抄にいう「（清盛ハ）ヨクヨクツツシミテイミジクハカラヒテ、アナタコナタシケルニコソ」の、政治家清盛の一面、又、「福原大相国禅門いみじかりける人也。（略）人の心の感ぜしむとは是なり。」（『十訓抄』）と語られる人間性も、『平家』の清盛造型においては切り捨てられているような感がある。

保元元年七月に宇治の左府代をみだり給し時、安芸守として（略）次に平治元年十二月信頼卿が謀反の時、御方にて賊徒をうちたいらげ、勲功一にあらず恩賞是おもかるべしとて（略）左右を経ずして内大臣より太政大臣従一位にあがる。（巻一「鱸」）

以上のような、保元・平治から治承に至るまでの間、平家の政権確立の過程を、清盛昇進の簡略化された記述の概略にとどめ、すぐ平家全盛の物語へと移行する。それは、全盛の平家の栄華をきわめたおごりの姿（「吾身栄花」「禿髪」）と重なり、具体的には「殿下乗合」に始まる清盛の悪行によって、「平家」の物語は始まると云ってよいのである。時枝氏は『平家』を「平安末期における諸勢力の角逐抗争とその消長の中に、平家の興亡を位置づけようとした」(注8)と、問題を提起されており、さらに、佐々木氏は平家の興亡に貫ぬかれた平家勢力と反勢力との闘争の物語としてみようとする。(注9)両氏とも、平家の興亡を中心とした『平家』の主題をみておられる。確かに、現在の『平家』の種々相、その複雑な形態をみる時、平家の滅びという全体を貫ぬく主線としての構想を見い出すことができ、それを中心に集約したものとして様々な事件を取りあげていることがわかる。しかし、それは他ならぬ十二世紀末の変革期の諸相を伴なっているのである。この治承を中心とした舞台の出発点は、あくまで清盛の悪行の〝力〟に動かされていると云えるのである。すなわち、概略的な清盛、平家の栄華の過程を記すにとどめ、頂点に登りつめた時点での栄華から物語に進行していく。当時の歴史の舞台、京周辺の都市社会層を中心とした世界を動かした清盛、いはば時代の歴史を動かした清盛の力が、物語を押し進めて行くと云ってよいのである。王法・仏法何ものをも恐れない清盛の力が、平家の全ての並列された事件を吸収していく契機となるのである。その清盛の超人的とも云える行動力こそ、従来の伝統・秩序を破壊していく悪行の力として登場してくる。この意味でも、平家における「世のみだれそめける根本」という意識は、「コノフシギコノ後ノチノ事ドモノ始ニテアリケルニコソ」（『愚管抄』巻五）というように、平家没落の、いわゆる治承・寿永の変革期における動乱を提示する意味で、歴史を動かしていく清盛の「不思議な振舞」としての「平家の悪行」の始めなのである。

このようにして考える時、清盛造型の内における悪逆化の問題

は、後白河院を中心とする宮廷勢力、旧寺院勢力、源氏の武家勢力など各勢力の角逐抗争の事件を治承・寿永前後の変革期の中で「平家」の物語として、構想していく上での基本的姿勢にかかわってくるものと思われる。『平家』の清盛像にみる語りは、彼が治承年間の歴史を動かした自身の行動から、その独裁的力への反感にとらえられたものと云ってよいであろう。むろん、清盛にとって負の部分ばかり描かれているわけではなく、鹿谷事件においても「清盛を悪人とするよりは却って謀反を起した新大納言成親・俊寛・西光を悪人と見てゐる」(注10)のであり、梶原正昭氏がその論考〈『平家物語』の一考察―〝鹿の谷〟と白山事件―〉で詳細に検討されている如く、白山事件にみる山門に対する同情とは反対に、鹿の谷陰謀における院の近臣成親以下、西光らに対して一方的とも云える批判がみられるのである。しかしながら、こうして鹿谷事件においては、清盛の行為が全面的に否定されてはいないとはいえ、結果的にこの出来事を収捨した行為は人々の恨みや嘆きを引き起こすことになる。そして、この場合には未然にすんだが、法皇幽閉という王法への悪行の意図が示されるのであり、有形無形の形で清盛の悪行に結びつくことになるわけである。この点で、平家の全ての事件、出来事が、清盛にとって伝統的秩序社会への〝悪行〟と評価される強行態度を取らざるを得ないように構成されていると云ってよいと思う。周知のように、鹿谷事件に対する史実の清盛の態度は、『平家』とは反対に、院に対してむしろ、その意をむかえると云ってよいほど穏便に配慮していることがみえ、『平家』における虚構（いわゆる重盛諫言）は実際にはあり得ないことになる。

このような、清盛造型における虚構は、前述した「殿下乗合」等に最も顕著に現われているわけだが、これを富倉氏(注11)は、清盛を政治家としてではなく、一人の「罪深い人間」として描こうとする立場であり、広く庶民階級に理解しうる「唱道文学的な人間の捉え方」の造型として、清盛の造型に何らかの形で唱導家の参加を認めておられる。従って、『平家』における悪行が全て清盛個人の意志によるものとすることによって、『平家』にみる清盛造型のあり方と関連した虚構が生まれるのである。愚管抄、玉葉などの史実にみる政治家清盛のあり方を、全て猛き武人の一面において捉えることによって、彼が対決する後白河院、及び院近臣の院庁、又、比叡山等に代表される旧仏教の僧院社会等、旧王朝勢力とも云うべき概成秩序に対する新興勢力の武士階級の新しい武人のあり方がより明確化されていよう。それが、京都朝廷を支配する現状維持の伝統的旧秩序社会にとって、彼らからみた〝悪〟の破壊的行動による罪業を一身に負う清盛像の姿へとつながるのである。重盛造型に代表される律令体制の道徳的立場からの批判が、石母田氏のいわゆる清盛の戯画化にも通ずるのであるが、この『平家』における清盛の戯画化・矮小化と云われる形象は重盛造型のあり方にみる伝統的旧秩序への思慕と、崩壊しつつある旧階級基盤に対する賛美の心に反映された意味での、清盛に対する〝笑い〟という事象に形成された批判の態度なのである。この点で、「保元・平治」における清盛の戯画化の形象とは違うことに注意したいと思う。源氏に対する平氏の武人清盛への矮小化であり、保元・平治に描かれた純粋な武力という形で、中央に登場してきた新勢力からの、平氏の貴族的傾向と政治性にむけられた批判の目を感ずるのである。比較的実像に近い姿を写していると思われる初期保元・平治（半井本・第一類本）から、源氏に対

する感情移入の傾斜度を増す流布本に至るに従い、平氏の頭領「武人」清盛の形象化は一方の重盛が引きあげられるに反して、悪玉としても矮小化されていくように思われる。

この問題については、保元・平治の成立から平家の成長の過程との相互関係の中に、清盛造型の変貌を考えていく必要を考えるのである。先に述べた如く、富倉氏は政治家としてではなく「一介の権力者」「上は一人をも恐れず、下は万民をも顧ず死刑流罪を思ふさまに行ふ」猛き武人としての『平家』における清盛造型をみておられるが、後世における清盛流伝のあり方をみるならば、保元・平治・平家のそれぞれ初期の形成時代は別として、「猛き武人」であることが、時代の権力者として思うがままの悪行を押し通す清盛の姿とは必ずしも一致した形で意識されていないように思われる。武人としての平氏の清盛の力とそれを背景とした権力者としての巨大な姿は、彼が動かした治承年間のその歴史ものとして、『平家』の中に統合している。これは、『平家』にみる清盛造型の視点が玉葉に代表される旧貴族の意識に寄与されているためと私は考える。保元・平治と平家との、形成基盤の相違が自らうかがわれるのではあるまいか。後世に流布した保元・平治をみると、猛き武人清盛の性格は極めて矮小化されているのである。その例は以下の二・三にみる如く、武人としての清盛、すなわち平氏を矮小化する意識は明白である。

白河殿へ義朝夜討に寄せらるる事　（保元物語）
義朝六波羅に寄せらるる事　（平治物語）
清盛出家の事并びに滝詣で付けたり悪源太雷電となる事（平治物語）

そして、そこに『平家』に描かれた悪行人清盛に対する戯画化への意図とは違った観点を示していることを感ずるのである。

同じような視点から、今一つ、清盛についての後世の口承をひろってみよう。

「武将が落日を招き返したといふ物語は、久しい年代に互っての民間文芸の好題目であった」として、柳田氏は日招八幡、又は八幡太郎日招壇の口碑の流布について論考されているが、(注12) 八幡太郎義家の扇で日を招く伝説等にみるとは違い、清盛については戦場における英雄の力を示す伝承としてより、権力者としての権力を連想しての流布をみるのである。すなわち、柳田氏によれば、安芸の吉田地方の田植唄に、平清盛日を招く一章があるという。

本来田植唄なるが故に日を招くといふ章句があり、それが容易に厳島御幸記などの、六波羅豪著の記事に聯想せられて、此話を俗間に流布せしめたのだと見られる。(注13)

このような流伝について、『理斎随筆』は、「平相国入道の日輪を扇を以てまねき上げしかば、日輪三尺あがりしと俗に申伝ふるは、清盛の勢ひ四海を呑で、天子をも自由にせしありさまをもって、日輪を扇ぎ上げしとはいへるものか」と述べている。又、『平家』において「禿髪」の説話に伝えられる清盛への批判は、「清盛暴虐侈傲レ常」の独裁者に対する「暴君防二民之口一恣二其私一、噫一時雖レ似レ止二其謗一、而千歳伝レ之、更謗二其防口之苛一、則亦何益之有、属王遂死二于彘一、清盛不レ保二世一而亡矣、（略）」（『塩尻』）という儒教的善悪における判断である。「物怪」や「入道死去」の段にみる武人としての巨人の面目は失なわれ、善・悪に通ずる悪行人の力―〈中世説話において宗教的悪行人として描かれる武士その中に悪の力が大きいほど、又善をなす力も大きいという悪行人への感覚がある〉

―は矮小化された儒教的悪玉としての変貌をとげているのである。

以上、簡単にみてきたような清盛像の享受の変貌については、保元・平治の成立との関連において、又別の機会に考えてみたいと思う。

○

さて、このようにみると、清盛像における『平家』の理想化は、清盛の時代を回想した時点の比較的早い時期ではないかと思う。清盛生前の強大な力が超人的力として人々に記憶されており、しかも平家の怨霊の力に世が畏怖している時でもあろう。おそらく、始めに成立した清盛像の原型―それは史実を反映した段階での悪行人清盛の力に対する畏怖と蔑視の表現であったと思うが―がうすれ、その個人的力への関心は鱸の説話や「大塔建立」「慈心房」など、宗教的な方面に向けられたと思われる。（延・長・盛）にみる清盛死後の一連の清盛説話は、渥美氏の云われる如く、(注14) 民衆一般への教化と同時に、広い庶民層への浸透と理解を目的とした増補のあり方が考えられそうである。逆に云えば、民衆の清盛への関心のあり方が素朴な意味で清盛個人の英雄性を宗教的事象に結びつけたとも考えられるのである。清盛造型の基盤には旧体制下の人々の視点が反映されていると思うが、そればかりではなく、〈「重病をうけ給へりとて、京中・六波羅「すは、しつる事を」とぞささやきける」（巻六「入道死去」）〉と形象化される人々の、そのままに生の語りがあるように感じられるのである。革新の動乱期にあって、上流知識人階級には受けとめることができなかった清盛の英雄性に対する卒直な驚嘆と賛美が、一面における清盛像を形成していると云える。

この清盛におけるかかる理想化は、その造型の根本に矛盾する視点が相互に入ってきたためと考える。それは先に少し触れたが、一つは清盛の武力を背景とした力への畏怖と、又その力故に起こる蔑視からの戯画化という、相反する心理であり、義仲や義経の形象化にもそれは表われていると思われるのである。そして、清盛の場合、さらに『平家』に省略された部分、すなわち、治承以前の清盛への評価が考慮されねばならないであろう。

仁安三年二月、「前大相国所労、天下大事、只在二此事也一。此人夭亡之歟後、弥以衰弊」「彼人夭亡之後天可レ乱」（『玉葉』仁安三年二月十一日・十七日の条）とさえ、その実力を認められていた清盛が、同じ視点から、治承五年二月の死去の際に至ると、「凡過分之栄華、冠二絶古今一者歟。―（略）―如レ此之逆罪、無レ非二彼之胥物一」という批判をまぬがれ得なかったのである。しかし、ここでも「神罰冥罰之条、新以可レ知」とは云いながらも清盛の力に対して「誠宿運之貴、非二人意之所レ測歟」の、凡俗を超えた〝力〟への認識があったのである。

愚管抄に云う。

承安元年十二月十四日、コノ大相国入道ガムスメヲ入内セサセテ（略）先ハ母ノ二位日吉二百日祈ケレドシルシモナカリケレバ、入道云ヤウ、「ワレガ祈ルシルシナシ、今見給ヘ祈出デン」トテ、安芸国厳島ヲコトニ信仰シタリケルヘ、ハヤ船ツクリテ月マウデヲ福原ヲハジメテ祈リケル。…皇子誕生思ヒノ如クアリテ、思サマニ入道、帝ノ外祖ニナリケリ。

こうしてみると、清盛に対する理想化に通ずる面が既にうかがえるのである。

そして『平家』においては「清盛さばかりの悪行たりしかども、希代の善根をせしかば、世をも穏しう二十余年保たりしなり」（巻八「法往寺合戦」）との、回想にみる意識において理想化がある。清盛の「ただ人」ならぬ特異性は、治承・寿永の内乱を経て行く過程において、敵対する者にとってただ圧到的な意志と力を示す悪行として描写される。つまり、何度も云われてきた如く、治承年間という時点における指向とも云うべき清盛形象化のあり方に、悪逆化を強調しようとする作者の意識があるわけである。が、反面の「ただ人」ならぬ清盛への理想化は「慈心房」「祇園女御」等の説話にみる時、平家に語られた巨大な悪業を確認する意味での逆論理ともなっていることに気づく。清盛王胤説話である「祇園女御」も、本質的には清盛説話としての性格は希薄と云ってよい。「まことに白河院の御子にてをはしければにや、さばかりの天下大事、都うつりなどといふやすからぬことども おもひたれけるにこそ」の点において、この説話の清盛に対して持つ構想の主眼があると思われる。古くは築島の説話も、（四）ではわずか「経島之事不覚人士態不思議」とのみ記され、（屋）も同様に二、三行の極めて簡単なものであったことがわかる。「人ノ随付事、吹風ノ如(シ)靡(カスガ)(テ)草木ヲ(ニ)世ノ普仰事、降雨ノ同(レ)湿(スニ)国土(ヲ)」（巻一「禿髪」（屋）の詞章）というような一片の類型的詞章で、前半生への評価がなされているところに、『平家』成立における清盛造型の契機がうかがわれるようである。

同じような意味から、「慈心房」説話を取りあげてみると、

（四）はこの説話を記さず、ただ「此人慈恵大師化現云…為末代衆生済度三記(シ)大罪堕(チ)無間地獄見(タリ)」との伝承を伝えるにとどまるが、（屋）では抽書としてではあるが、慈心房の説話が成立している。そして、この説話の採収は、清盛の悪業が「悪業衆生同利益」という意味で、すなわち、彼が悪行をなし無間地獄に堕ることで衆生のための救済となるという逆論法の構想に生きてくるのである。（屋）において、炎魔法王自身の口から「其人ハ悪人ト見ヘタリ、サレトモ慈恵大僧正ノ化身ナリ」（（屋）の詞章）と云わせていることからも、この説話の『平家』における成立のあり方を示しているものと考える。勿論、これらの説話が、清盛にみる悪行の非業の最後を何らかの形で救済しようとする意図を持っていることも確かである。生前の強力な力に加えて、怨霊への恐れが、清盛の理想化につながって伝承されたであろうことは容易に推測できるのである。それに加え、清盛像の形成の中で、重盛との関係において多く戯画化しようとする意識があることは、(注14)『平家』における小松系と呼ばれる人々の伝承の問題からも、(注15)清盛造型の形成における問題をさぐることができそうである。

〈注〉

1　松本新八郎「清盛」（『解釈と鑑賞』昭32・9）

2　渥美かをる『平家物語の基礎的研究』—第三章平家における人物像—

3　阪口玄章『平家物語の説話的考察』

4　注2に同

5　今成元昭『平家物語流伝考』

氏によれば、この「祇王」は(4)愛を破壊する悪行という清盛の罪業になる。

6　代々木八郎「平家物語の達成―語りもの文芸として―」（『国語と国文学』昭45・1）
氏は―「殿下乗合」が「世の乱れ」の始めであり、かつ「平家の悪行」の始めとして照応しており、それらの史観に立って（覚）は鹿谷事件へもっていく物語的仮構をみている、―とする。
7　注1に同
8　時枝誠記「『平家物語はいかに読むべきか』に対する一試論」（日本文学研究資料叢書『平家物語』所収）
9　佐々木八郎『日本文芸の世界』
10　釜田喜三郎「平家物語における人間描写」（『解釈と鑑賞』昭25）
11　富倉徳次郎『平家物語全注釈上』『平家物語研究』
12　柳田国男『柳田国男集』第九巻
13　注12に同（P89）
14　鈴木則郎「『平家物語』における平清盛の人物像」（「文化」昭39・11）
15　岩瀬博「重盛・維盛伝承と熊野伝承」（伝承文学研究2）　永井義憲「平家物語と観音信仰」（日本仏教文学研究）　水原一「平家物語、維盛六代説話の形成」（鷹1）等を参照。

〈付記〉
本文中において、覚一本は岩波大系本により、以下、源平闘諍録は「源平闘諍録と研究」未刊国文資料、四部合戦状本（慶応斯道文庫）、延慶本（応永書写延慶本　吉沢義則校訂）、屋代本（桜楓社佐藤謙三・春田宣編）、百二十句本（思文閣　高橋貞一校訂）、長門本は図書刊行会刊行のものを使用した。